

日本語教育での教授法について ②

LL 活用上の課題

LL (Language Laboratory) が始まった頃の話は前回述べた。筆者も LL を使って外国語を学び、後に LL を使って日本語を教えることになるのだが、この LL を活用する上でいくつかの課題もあったように思う。LL は文型を繰り返して練習し、定着させるのに有効な機器ではあるが、学習者が意味を考えずに、ただ文を繰り返したり、機械的に動詞の活用をさせたりする側面があった。言い換えれば、正確な文を発話させることに主眼がおかれていたのである。そのほかにも、文の構造を絶えず意識させ、コミュニケーションのための練習とはなりにくい側面もあった。

天理大学別科勤務時代のエピソードを紹介する。1年間の学習を終え、2年目に入り、留学生たちは寮を出て、市内のそれぞれの所属教会の詰所へ移った頃の話だが、「学校では先生の日本語がよくわかるけど、詰所で日本人の話す日本語がわからない、習った日本語が使えない」と言われたことがある。詰所では関西弁の人もいれば、地方の方言話者もいるであろうし、学校で標準的な日本語を習っていることを考えると、無理のないことだとも思うが、今振り返ってみれば、そうしたこと以上に、当時の教授法が原因していたのではないだろうか。

また別のエピソードだが、授業での自由な質疑応答の時間、ある学生が答えを考えている時に別の学生が「チャカ！」と言った。すると、クラス中が笑いに包まれた。筆者は何のことかわからず、尋ねてみると「チャカ！」というのは、LL 教室で学習者が発話した音声を録音する際、テープを自動で録音・停止させるキュー信号のことであった。このキュー信号によって機器は制御されているが、録音・停止する時に「ガチャ！」と音がする。その学生は韓国人だったのだが、「チャカ！」と聞こえていたようだ。擬態語の面でも興味深いことだが、それはともかく、この音はリピート練習、代入練習、変換練習などの際に LL のテープ教材の中に入っているキュー信号によって、カセットテープを制御する際に発生する音のことだった。つまり決まった長さのポーズの間に学生は答えなければならないわけで、それを皮肉ったわけである。笑い話のようだが、これは教授法を考える上で大事なことであったように思う。実際のコミュニケーションの場では発話する時間が制限されることはなく、また答え方も様々である。あるいは言葉を発せず表情で応えることもある。現実のコミュニケーションとは違うことを練習や試験で行っているわけだが、筆者も文型を間違わずに正確に作り出す訓練を積み重ねていけば、しゃべれるようになると信じて授業を行っていたのであった。この時の反省から後の「コミュニケーション・アプローチ」の研究に続いていったのである。

どうして機械を取り入れるのか

語学教育にどうして LL 機器のような機械が導入されるのか。筆者は、語学教育に機械を介在させる意義は、教師による学習活動ではできないことを可能にしてくれるから、機械を介在させるのだと考えている。LL 機器には様々なメリットがあるのは周知のことだが、機械である以上、人間のように臨機応変な対応をすることはできない。したがって、生身の教師でなければ

ば対応ができない部分は生身の教師が担当し、機械に頼らなければならない部分は機械が担っていくことが自然ではないだろうか。LL 機器は、ネイティブスピーカーの発音を繰り返して聞いたり、少しまとまった内容の話を聞き取ったりするヒアリングの練習や文型のドリルを行うのに有効である。また LL 機器を導入することで、素早く反応する訓練もでき、直感的に文をとらえる習慣も身についていく。さらに、LL 教室では、学習者はどこに座っていても、同じようにはっきりと音声を聞くことができる利点もある。その反面、音声のみで機械的に文法項目の活用を練習させるドリルなどは、場面や意味などを思い浮かべずに習ったとおりの文法規則を当てはめて変化させるだけで、活用の練習にはなっても実用的とは感じられず、学習意欲をかきたてるようなものとは言えない部分もある。機械は万能ではなく、導入する際には留意しなければならないことも多いのである。

教授法のパラダイムシフト

LL に関する筆者の体験を紹介したが、そうした経験があったからこそ、教授法に関しても研究し、よりよき授業になるようコミュニケーション活動も取り入れることができたのである。その結果、授業内容は改善していった。日本語教育において 1980 年代は大きな変化のあった時代であることは以前にも書いたが、教授法においてもパラダイムシフトがあった時代である。この時期は、オーディオリンガル法からコミュニケーション・アプローチへとという流れで、授業法改善の研究が進んだ時代であった。日本語教育の研修会に出かけても、コミュニケーション・アプローチの実践例の発表などがしばしばあった。またアルク社が発行していた日本語教育の雑誌『月刊日本語』にも、コミュニケーション・アプローチに関する多くの記事が載っていた。時代の流れがそうだったのかもしれないが、従来のオーディオリンガル法ではだめだ、これからはコミュニケーション・アプローチの時代だという風潮さえあったように感じている。

「教授法の比較」

	オーディオリンガル法	コミュニケーション・アプローチ
発音	母語話者なみの正確さ	母語話者に理解可能な程度
目指すもの	正確さ	流暢さ
重視するもの	音を通じた「型」語彙の習得	コミュニケーション能力
誤り	避けるべきもの	修得過程に生じるもの
中心	指導者	学習者

それまでは、アメリカの構造言語学が行動心理学の影響を受け、言語学習というものは、機械的な口頭練習によって習慣形成するという考え方が主流であり、そう信じて授業を行っていた教師も実際に数多くいた。しかし、日本語教育の現場で教えている多くの教師の中には、実際の授業の現場経験から疑問をもつ教師も現れて、大きな論争にもなったのであった。当時、日本語教育センター主任であった渡辺治則・天理教語学院前校長とも、よくこのことについて話し合った。どちらか一方を完全否定するのではなく、それぞれの長所は長所と認め、短所を補うように授業を組み立てていけばいいのであって、現在もそうしている日本語教育機関は多いのではないだろうか。その後、90年代後半からはパソコンが普及し、語学教育へも積極的に利用される時代に入っていく。